

明日 への 話題

もっと ユーモアを



日本取引所自主規制法人
理事長

さとう たかふみ
佐藤 隆文

ユーモアは場を和ませ、コミュニケーションを滑らかにする。聴く側、読む側の頭を柔らかくし、意思疎通を楽しくさせる。たまに英語のスピーチを頼まれたときは筆者も、途中に軽いジョークを混ぜるよう努めている。聴衆が即座に反応してくれたときは「してやったり」の気分になり、話す側のモチベーションも高まるというものである。

昨今、メディアにおけるユーモアが減ったと感じる。昔は新聞の政治欄には毎日、記事に登場する有名人のデフォルメされた似顔絵や、錯綜した利害関係を皮肉混じりに描いた図柄や、問題の所在を鋭く直感的に訴える描写が、一コマ漫画のように掲載されていた。最近このような楽しみが影を潜めてしまったのは、世界各地で独裁的な指導者が存在感を印象づけ、強権的な政治手法が幅を利かせていることと関係があるだろうか。異論を挟ませない雰囲気が増えつつあるのだろうか。タテマエ論に終始しホンネの議論を回避した方が安全ということだろうか。

筆者がかつて属した大蔵省にはジョークを楽しむ諸先輩が多くいた。その精神を現在に引き継いでいるのは、財務官の経験者など外国知識人と日常的に接していた人々に多い。欧米社会ではユーモアが日常生活に生きており、メディアもそうした読者・視聴者のニーズに応えるので、そのことの反映かもしれない。

さて時と場合をわきまえた絶妙なジョークを発するためには、教養と品性に裏づけられた当意即妙が必要になる。過度な風刺は人を傷つけ、ときに悲劇を招くこともある。配信記事でのジョークには多少準備する時間があるが、アドリブではセンスの良さと頭の回転が勝負になる。

すぐには理解されず、後になって明らかにされるユーモアもある。以下は、長くエリザベス女王の警護官を勤めた男性の回想として、2016年に英国のThe Times紙に紹介された小話である（筆者抄訳）。バルモラル城^(注)の庭を、コートとスカーフの目立たぬ服装で散策していた女王が、アメリカ人観光客の一群と遭遇し、「近所に住んでいるのか」と問われて「近くに家がある」と答えた。「では女王を見たことがあるか」と問われて即座に「ない」と答え、警護官を指差して「でも彼はある」と付け加えた。観光客は、誰と話していたかを悟ることなく過ぎ去った。

(注) アバディーン近郊にあるイギリス王室の夏の離宮。5月～7月に一般公開されている。